

## 世界のブルーベリー産業 2025年の総括

[FreshFruitPortal 2025年12月31日](#)

### 2025年の世界のブルーベリー産業: 「ブルー ルネッサンス」の年

2025年が終わりに近づく中、世界のブルーベリー産業は歴史的な岐路に立っている。かつてはニッチな「スーパーフード」であったものが、名実ともにグローバルな商品へと成熟したが、この転換点までの道のりは決して直線的ではなかった。

この1年は、この「(業界を牽引する)青い原動力」の動かし方が抜本的に再構築された年であり、2020年代初頭の混沌とした量的急増から、より洗練された消費者中心のモデルへと移行した。そこでは、品質と品種の更新がプレミアム化と市場の分化を促進し、以前は薄かった利幅が広がったことで、収益性の高い成長産業であることが明らかとなった。

伝統的な西洋市場のリスクを軽減したい輸出業者は地理的な多様化を積極的に進めており、2025年を包括的に振り返ることによって、塗り替えられた世界市場の地図が明らかになる。

しかしあそらく最も重要なのは、世界中の小売店の棚に常に並ぶ高品質な定番食材としての地位に対応した周年供給を確保するため、ブルーベリー業界が「平坦化された出荷曲線」を習得し始めていることである。

#### 大きな転換: 量から安定性へ

長年にわたり、ブルーベリー業界の主な目標は単に生産量を増やすことであった。しかし、2025年は「量」が「安定性」に王冠を奪われた年となった。市場は飽和状態に達し、柔らかい、酸っぱい、小さい等の質の悪い果実は、どんな値段でも売り先がなくなった。これによって、業界全体で品種更新の大きな波が起った。

この変化により、古いブルーベリー品種は冷凍・加工部門に追いやられ、生鮮部門は入荷量の多い市場でも高価格で取引できるプレミアムなブランド果実に割り当てられるという決定的な分化が可能となった。

#### リスク軽減としての地理的多様化

2024年が市場の集中を懸念する年であったとすれば、2025年はブルーベリー業界がそれに対処した年であった。現在91億ドルの市場価値を持つ米国が潜在的な貿易摩擦に直面している中、世界の輸出企業は出荷先の「リスク軽減」を優先した。これにより、ブルーベリー市場の世界地図は急速に拡大した。

最も重要な動きは東南アジアへの拡大であった。今年、オーストラリア産ブルーベリーはベトナム市場に無事に参入し、ペルーはインドネシアへの歴史的なアクセスを獲得した。

一方で、アフリカは新たな生産のフロンティアとして浮上した。モロッコが急成長を続ける一方で、ジンバブエはその独特な気候と新たに署名されたプロトコルを活用して高品質な果実を関税ゼロで中国に輸出しており、2025年の「注目株」となった。

この地理的な広がりは、単に新しい顧客を見つけるということではない。米国政府の政策変更や欧州での港湾ストライキが、もはや一国の輸出シーズン全体を損なうことがないようにするための戦略的な動きである。

#### 平坦な出荷曲線の習得: ペルーの影響

おそらく、過去5年間で最も業界を揺るがした要因は、ペルーの急激な台頭であっただろう。

このアンデスの国は、2025年に世界最大の輸出国としての地位を確固たるものにしたが、それは「平坦化された出荷曲線」という新たな戦略によるものであった。以前は、ペルー産果実が12週間の集中した期間に市場に大量投入され、「供給過剰」が発生し、ペルー自身を含むすべての関係者にとっての価格壊滅が起こっていた。

2025年には、ペルー・ブルーベリー協会(Proarándanos)が率いる同国ブルーベリー産業は、出荷期間を大幅に延長するため、高度な剪定技術と低温要求の少ない多様な品種の組合せを活用した。10月から11月にかけての大規模なピークの発生を回避することで、従来は考えられなかつた市場価格の安定がもた

らされた。

このサプライチェーンの「円滑化」により、小売業者は供給の「急落」が無いとわかった上で、長期的な販促活動を自信を持って計画できるようになった。ペルーが周年供給体制を確立したこと、他の産地は革新か撤退かの選択を迫られ、これにより世界のブルーベリー産業全体の参入障壁が実質的に引き上げられた。

### 経済的成熟とブルーベリー産業の「プレミアム化」

ブルーベリー産業は2025年に、事実上の「経済的成熟」を迎えた。

データによると、アメリカでは消費者の54%が日常的にブルーベリーを購入しており、数年前と比べて大幅な増加となっている。しかし、この果実が家庭での定番となるにつれて、消費者の期待も変化した。

現代の消費者はもはや一般的なブルーベリーに満足せず、「スナック体験」を求めている。

これにより、この品目の「プレミアム化」が進んだ。小売業者は現在、**ジャンボサイズのベリー**や**有機栽培品**（現在約20%の市場シェアを保持）、さらに「味重視」のブランドに棚のスペースをより多く割いている。

しかし、この成功は販売上の難題をもたらしている。ペルー、メキシコ、米国の記録的な収穫物を価格を暴落させずにどのようにして捌くかという課題である。

供給量が増えても、この品目の「価値」が無傷で保たれることが目標である。

### 自動化による効率化：生産現場の未来

利益率の縮小と世界的な労働力不足により、手作業での収穫や梱包は次第に持続可能でなくなっている。これに対応し、ブルーベリー業界は必要な収益を守るため、最先端技術に目を向けている。

梱包施設では、AI駆動の光学選別機によって、すべての1つ1つの果実の糖度、硬さ、内部の欠陥を驚異的な速度で分析できるようになった。

今後を見据えると、「自動果樹園」はもはやSFではない。2025年には、生鮮市場向け品質の果実を収穫できるロボット収穫機が初めて大規模に導入された。

これらの革新的技術がより手頃なコストで利用できるようになるにつれ、ブルーベリー産業の未来はハイテクな製造プロセスのような姿になりそうだ。そこではデータが土壤と同じくらい重要であり、人の手作業をハイテクによって高度化することで、1つのパックに入るすべてのベリーの品質が均一であることが保証される。

2025年のブルーベリー産業は、それがもはや「好況と不況に翻弄される」セクターではないことを証明した。品種更新、地理的拡大、そして技術的卓越性を通じて、それは洗練されたグローバルなマシンへと変貌を遂げた。

気候変動や貿易障壁といった課題は依然としてあるものの、世界で好まれる「スーパーフルーツ」であるブルーベリーが今後、かつてないほど品質が安定し、手に入りやすく、価値の高いものとなる未来へ向けて、2025年の「ブルー ルネッサンス」（ブルーベリー産業の大きな転換期）はその土台を築くものとなった。